

Title	米価は安きか高きか
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.12 (1928. 12) ,p.1649(1)- 1725(77)
JaLC DOI	10.14991/001.19281201-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19281201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

今度

皆々様の御勧めに依りまして
洋食部に喫茶部を設けました
何卒御引立を………

三田慶大正門前

長谷川

果實店
ツリーダフ、ンテン

電話高輪三四〇四

正確ナル眼鏡



慶應義塾大學病院 御用

清野眼鏡店

四谷區麹町十三丁目十三番地
電話四谷四五四三番

三田學會雜誌 第二十二卷 第十二號

米價は安きか高きか

高城 仙次郎

一 米價問題

我が國民六千萬人の全部が米の消費者であるのみならず、米の生産者及び其の家族の總計が全人口の五割以上に相當してゐるのであるから、米價の高低騰落は日本國に於ける最大の經濟問題で無くとも、少くとも最大經濟問題の一つであると言はなければならぬ。即ち米價が騰貴すれば、農民は概して利益を受くるも、消費者の家計費が増加し、細民の生活難の問題が起り、米價が之に反して低落すれば、都會の住民は一時利益を蒙るも、米價の低落に基く農民の購買力の減少は都會よ

り農村に供給する貨物に對する需用を減退せしめ、不景氣は其の爲め全國一般的になる虞れがある。夫れ故に米價が著しく騰貴しても、又其の反對に甚しく低落しても、米價問題が沸騰する。

所が幸ひにして米穀の供給量並に米價の調節を目的とする米穀法が實施されてより本年夏までは、米價は比較的安定して、數日乃至二三十日間といふが如き少期間内に甚だしく動搖しなかつたのであるが、八月上旬より二ヶ月間に米價調節實施以前に劣らざる亂高下を實現した。即ち八月一日には東京米穀取引所に於ける精算米の平均相場は三期を通じて左の如く二十八圓臺であつた。

然るに九月七日に於ては精算米の平均相場は左の如く三十六圓乃至三十七圓臺に上り、八月一日に比して八圓乃至九圓の騰貴になつてゐる。

八月限	二八・一七	九月限	二八・六七	十月限	二八・八〇
九月限	三六・七二	十月限	三七・六四	十一月限	三六・二八
十月限	三三・二〇	十一月限	三一・〇〇	十二月限	三〇・九〇

更に約一ヶ月後の十月四日の相場は左の如く著しき低落を示してゐる。

即ち精算米の相場は八月一日より九月七日に至る三十六七日間に三割以上騰貴し、更に九月八日より十月四日に至る一ヶ月以内に於て一割乃至二割弱暴落したのであつた。

尤も此大變動は精算米の相場に生じたものであつて、若し此急激なる騰落が精算米に限られてゐたとするならば、新聞紙の經濟欄を賑はすに止まり、國民一般の經濟問題にはならず、濟んだかも知れない。何故となれば國民の消費するのは正米であつて、精算米でないからである。所が此正米の市價も殆んど精米に劣らざる程激變した。即ち東京深川市場の正米平均價格は八月一日には一石二十八圓七十錢であつたが、九月七日には三十五圓に上り、三十六七日間に六圓三十錢の騰貴を呈し、更に一ヶ月後の十月五日には三十圓に再び暴落したのである。

米價が短日月間に斯くの如く急騰急落したのであるから、米價に就きて世論が囂々として喧しくなつたのは當然である。而かも論者の主張する所は各人の立場に依りて異なつて居つた。即ち米の生産者の利害を代表する者は米價は低くに失すると唱へ、消費者の利益を代表する者は米價が高か過ぎると主張するか、或

は米價の急激なる暴騰暴落は米穀法に依る米價調節の無效力を證明してゐるものであることを指摘したのである。

然し米價が安いと云ひ、高いと唱へるには、何物かを標準としなければならぬ。只漠然と米が高いとか或は低く過ぎると言ふだけでは意味をなさない。假りに米が十年以前に比して二倍に騰貴してゐても、他の物價が平均三倍に騰貴してゐるとすれば、米價が高くなつたと言ふよりか、寧ろ比較的になつたと見て差支ないのである。又之に反して米價が假りに或期間内に一割低落したに拘らず、他の物價の總平均が若し三割下落したとすれば、米の市價は却つて比較的になつたと云ひ得ると思ふ。従つて米價の高低を論ずるには、何々を標準とすれば、米價は高く、又何々を標準とすれば、低いと看做す可きであるといふとを明示しなければならぬ筈である。然るに米價の高低に就き云々する人の多くは、單に米が高いとか、安いとか論ずるに止るか、或は米價の高低の判断に用ふる標準を與へてゐる場合に於ても、唯此標準——例へば米の生産費——に比して、米價が低いと簡單に論斷するに過ぎずして、生産費が一石何十何圓に上るから、米價も一石少くとも何

十何圓以上でなければならぬと云ふが如く、生産費と米價との關係をば數字を以て明瞭にしてゐる例が少ない。而かも此等の少數の例外に於ても、即ち何故に米價が高か過ぎると云ひ、或は低くに失すると論斷し得るかを事實と統計とを用ひて明かにせんと試みてゐる場合に於ても、其等の事實と統計とに基く推論に誤謬を發見することがある。——次項參照——

要するに米價の高低に關する議論には大部分米が高か過ぎるといふことか、或は低く過ぎるといふことが先入主となつて居り、且つ此先入主となつてゐる意見が直ちに結論となつて現はれてゐるのであつて、假りに事實並に統計が引用されてゐるとしても、夫れは單に結論に都合の宜いものが選擇採用されてゐるのに過ぎないやうに見えることが尠く無い。

實は筆者は以前より米價の高低に關して、主觀的見地を全く脱したる客觀的研究の必要を感じてゐたのである。それ故に、本年米價の暴騰暴落が再び一大問題となつたのを機會として、米穀生産者並に消費者の利害關係を度外視し、客觀的に最近の米價は高いのであるか、或は低いのであるかを明らかにするに努めること

にした。而して此米價の高低を判断する尺度として用ふる爲めに、幾個の標準を設け、各其標準に依りて米の理想價格を計算し、實際の米價が此理想價格に超過せる場合には、米價は高きに失すると看做し、實際市價が理想價格よりも低くければ、米價は低く過ぎると云ひ得るものであるとすることにしたのである。以下此理想價格の算定に用ふる爲めに採用した所謂標準は、

- 一、米の生産費
- 二、一般物價
- 三、食料のみの市價
- 四、穀物のみの市價
- 五、賃銀

の五個である。然らば此等の五箇の標準に基きて計出したる米の理想價格は、一右幾何に相當してゐるか。左に項を改め順を追ふて説明を試みることにする。

二 米の生産費と米價

米價の高低を判断するに用ふる標準を求めつゝある際に、何人と雖も氣付き易

きは米の生産費の高低である。現に貨物の價格は生産費に依りて定まるものであると云ふのが、其主張の正否は別問題として、經濟學に於ける有力なる一學説である。従つて米穀の生産費を標準として米價の高低を論ずる人が尠なくない。殊に農民の利害を代表する人士の間に於て然りである。例へば全國農民組合の中央委員長杉山元治郎氏は、『經濟往來』の昭和三年十月號に於て、『本年の米價に就て』と題し、生産費を標準として實際の米價は餘りに低く過ぎると論斷されてゐる。此斷定の根據は帝國農會の調査に係る農家の收入並に支出の計算であつて、杉山氏は此の計算を基礎として、左に掲ぐる表を作製し、『經濟往來』の論文に載せて居られる。

	自作	小作
種子	一・〇七	一・一一
肥料	一六・九〇	一六・二八
諸材料	一・五七	二・〇三
勞力(人)	三三・六三	三五・六七
勞力(畜)	四・六五	三・六二

農具	三・三一	二・〇〇
農舍費	二・六三	一・五二
公課諸負擔	一〇・五四	三九・四四
土地資本利子(四分)	二六・一六	
支出計	九九・四六	一〇一・六七
收入	八七・四四	八八・八八
差引不足	一二・〇二	一二・七九

(收量玄米二・四五〇)(收量玄米二・四八九)

此表に掲げたる自作及び小作農家の収入並に支出は大正十一年、十二年及び十三年の三ヶ年間に於ける田地一反の平均であつて、大正十五年七月の日附にて帝國農會の發表せる『米生産費調査資料』に載せてゐる。(収入は十六頁、支出は二十二頁) 杉山氏は此帝國農會の調査せる大正十一年——十三年の平均収入と支出とを對照して右表の左端にあるが如く、田地一反に付自作に於ては一ヶ年十二圓〇二錢、小作に於ては、十二圓七十九錢の缺損を生ずることを示されたのである。

(農會の發表せる數字に據れば、自作農の収入は八十七圓十四錢であるにも拘らず、杉山氏の論文にては、八十七圓四十四錢になつてゐるが、左程の問題でないから、右表には杉山氏の數字を其の儘掲げることにした)。——兎に角杉山氏は此表を掲げたる後に、左の如く述べられてゐる。

『右の表によると玄米一石當りの生産費は自作に於て四十圓六十錢、小作に於て、四十一圓二十五錢で是による市場價格は少なくとも、四十五圓内外であらねばならぬに拘らず、實際は之に反して石に對し七八圓甚しき時は十數圓も下位にあることを先づ念頭に置いておき度いことである。』

即ち杉山氏の説に據れば、生産費を標準とするならば、米は一石四十五圓内外でなければならぬのである。若し此説が正しいものであるとするならば、目下昭和三年十一月の中旬の相場、東京深川正米市場は、上中下米の平均を取れば二十九圓内外に過ぎないから、杉山氏の主張さるゝ如く、實際市價は同氏の計出せられたる標準値段よりも十數圓も下位になつてゐる。然し問題は、一石四十五圓内外なる此標準値段が正當の相場であるや否かである。所が此標準値段は前表に掲げ

たる一反當りの米穀生産費の合計をば收穫高にて除して計出した一石當りの生産費を基礎として定めたものなるは明かである。(註一)即ち此一石當りの生産費として杉山氏が計算されてゐるのは、自作農の場合に於ては四十圓六十錢であつて、之に運賃、其他の諸掛り、問屋の口錢等として、四五圓を加へれば、杉山氏の要求する標準値段たる四十五圓内外となる。然し此計算方法には首肯の出来ない點がある。何故となれば、副産物の代價を全く除外してゐるからである。杉山氏の計算の基礎となつてゐる帝國農會の調査に據れば、自作農の場合には、一反に付七圓七十三錢に上る副産物の収入がある。米一石當りの生産費を計算するには、一反當りの生産費の合計より此副産物の代價を差引き、残額をば一反當りの收穫高にて除す可き筈である。此計算方法に依れば、米の生産高は一石に付三十七圓四十四錢となる。之に運賃、諸掛り、口錢等として、四圓を加へれば、四十一圓以上になる。之にても尙ほ實際市價は十圓以上も低い。然らば、米價は生産費に比して低く過ぎると言ふ可きであるか。此質問に對して、解答を與へるに就きて、吾々の考慮しなければならぬ事情がある。それは何であるかといふに、前記の生産費は上述

の如く帝國農會が大正十一年十二年並に十三年の三ヶ年間の生産費の平均に外ならないのであるから、此の生産費と比較す可きは本年の米價でなくして、矢張り大正十一年より十三年に至る三ヶ年間に於ける米價の平均でなければならぬ事である。然らば此三ヶ年間の米價は如何といふに、東京市に於ける上中下米の平均は大正十一年には、三十五圓十五錢、大正十二年には、三十二圓八十錢、大正十三年には、三十八圓四十七錢であつた。此三ヶ年を平均すると、三十五圓四十七錢になる。今此平均相場を前記の純生産費、即ち三十七圓四十四錢と比較するに、其の差は僅々二圓に過ぎない。然し若し生産費に、運賃、諸掛り、口錢等として假りに四圓を加算するとすれば、開きは約六圓になる。所が此計算の基礎となつてゐる生産費の合計の内には、土地資本利子として、二十六圓十六錢が計上されてゐる。此利子は年利四分として計算したものである。即ち田地の利廻りを四分として計算すれば、農家は一石に付約六圓の損失を蒙ることになる。従つて若し逆に收穫の賣上を基礎として計算すれば、田地の利廻りは年四分以下になるのである。(註二)斯くの如く帝國農會の調査に據れば、自作田地の利廻りは年四分に達しないの

であるが、日本勸業銀行が全國の小作地に就きて調査した所に據れば、利廻りの平均は年四分よりも遙かに多くなつてゐる。此勸銀の調査は是れまで都合四回北海道並に各府縣内の代表的田地並に畠地の利廻りに就いて行はれたのであるが、其の内、田地の利廻りの全國平均は左の如くである。

調査順	調査年度	調査事實の年度	平均利廻り
第一回	明治四十二年	自明治四十年 至明治四十二年	六・一四
第二回	大正二年	自明治四十三年 至大正元年	六・五六
第三回	大正八年	自大正八年二月 至大正八年四月	七・一〇
第四回	大正十四年	自大正十四年一月 至大正十四年四月	六・四三

備考。第一回並に第二回の調査にては、田地の見込價格を標準として計算したる利廻りと、實際賣買價格を基礎として計出したる利廻りと、二種あるが、後者を採ることにした。又第一回の調査にては、日本勸業銀行が直接照會して調査したものと、各地の農工銀行を經由して調査したものとがあるが、直接調査の數字を選んだ。更に第三回並に第四回の調査にては、田地を上、下及び普通の三種に分ち、各種に就いて利廻りを計算してゐるが、本表には、普通即ち中田の平均利廻

りを採ることにした。

第一回調査の利廻りは日本勸業銀行發行の明治四十二年調第一回全國田畑利廻り調に據る。

第二回調査の利廻りは大正三年七月日本勸業銀行發行の第二回全國田畑利廻り調に據る。

第三回調査の利廻りは日本勸業銀行發行の大正八年四月調第三回全國田畑賣買價格及收益調に據る。

第四回調査の利廻りは日本勸業銀行發行の大正十四年三月調第四回全國田畑賣買價格及收益調に據る。

即ち右表に示すが如く、勸業銀行の調査では、前後四回共に小作田地の利廻りは六分以上であり、其中第三回の調査では七分一厘になつてゐる。右は利廻りの全國總平均であつて、地方に依りて利廻りは餘程異つてゐる。左表は各府縣の平均利廻り中最低並に最高の率のみ掲載したものである。

實際賣買値段に依る田地の利廻り

第一回調査 最低 三分七厘五毛(和歌山)

最高 一割二分八厘四毛(宮城)

第二十二卷 (一六六一) 米價は安きか高きか

第二回調査 最低 四分一厘九毛(愛知) 最高 九分六厘八毛(岩手)

第三回調査		
上	最低	五分二厘三毛(愛知)
普通	最低	九分七厘四毛(青森)
下	最低	六分三厘五毛(福井)
上	最高	一分〇厘四毛(宮崎)
普通	最高	六分五厘一毛(愛知)
下	最高	一分七厘四毛(青森)

第四回調査		
上	最低	四分〇厘一毛(大阪)
普通	最低	四分三厘三毛(宮崎)
下	最低	四分九厘九毛(大坂)
上	最高	六分九厘九毛(宮崎)
普通	最高	四分七厘二毛(大坂)
下	最高	四分四厘四毛(大坂)

即ち第一回の調査に於ては、最低利廻りは和歌山縣の三分七厘五毛に過ぎないが、他府縣の利廻りは皆四分以上であつて、最高は一割一分八厘四毛(宮城縣)に上つてゐる。他の調査では第一回の調査に於けるが如く最低利廻りと最高利廻りととの間に著しき相違はないが、最低が四分以上である點に於て一致してゐる。此日本勸業銀行の利廻り計算は左の方法に依つて行つたものである。

- (一) 一反の小作米に米の賣價を乗じて收入を計出し、
- (二) 此收入より税金、管理費、其他の經費を控除して、純收入を算定し、

(三) 此純收入をば田地の時價にて割りて利廻りを計算する。
 此計算方法を公式にて示すとすれば、左の如くなる。

$$\frac{\text{小作米}(米の賣價) - \text{費用}}{\text{時價}} = \text{利廻}$$

此式に依りて、勸銀が大正十四年の春各府縣の代表的の中等田地に就きて調査計出した利廻りの全國平均は前表に示したるが如く、六分四厘である。六分四厘の利廻りと云へば、決して低い利廻りでは無い。有價證券中にも之より低い利廻りになつてゐるものが尠くない。例へば日本勸業銀行の調査に據れば、昭和三年十月一日に於ける國債八種の利廻りは五分一厘二毛、地方債十種は五分七厘七毛、勸業債券八種は五分九厘四毛四絲になつてゐる(註三)。

斯くの如く勸業銀行の調査に據れば、普通田地の利廻りは一部分の有價證券の利廻りよりも高くなつてゐるが、是れは一般に想像されてゐることゝ一致してゐないと思はれる。由來土地の利廻りは他種の財産の利廻りよりも低いものと看做されてゐる。土地の時價は一ヶ年間の純收入を利子にて還元して計算するの

が普通である。即ち地價は原則として土地より生ずる地代及び其他の總収入の合計より諸経費並税金等を控除したる殘額をば、利子歩合にて割りて、資本金額に引直したるものである。従つて此地價にて純収入を除して得たる利廻りは無論右の利子と一致することになる。然るに我が國では必ずしもそうで無い。何故かと云ふに、少くとも次の三個の理由の爲めに、地價が土地の純収入を利子にて還元したるものよりも高くなつてゐるからである。

一、土地は所有者に比較的高き社會上の地位を與へること。

二、人口の増加に比して埋立等に依る土地面積の増加が困難なる結果として、將來に於ける土地の騰貴が豫想されてゐること。

三、土地は他種の有形財産即ち家屋、船舶、商品等の如く限られたる命數を有せず、現代の人類の立場より觀れば、永久的の性質を持つてゐるのみならず、火災、天災、地變等に依りて殆んど何等の損害を蒙らざること。

土地の現價は即ち此等の理由に依り簡單に純収入を資本化したる金額よりも高くなつてゐるのである。従つて其現價を以て純収入を除して得たる土地の利

廻りは普通の利子歩合よりも低くなる筈であるのみならず、其の實例の多々あるのは茲に喋々するの必要が無い。然るに日本勸業銀行の調査に據れば、上述の如く田地利廻りの平均は六分四厘になつてゐるのであるから、田地の利廻りは高過ぎると考へる人もあるかも知れ無い。此六分四厘の利廻りは大正十四年の米價を標準として計算したものであるが、假りに農家が六分四厘よりも低き利廻り、例へば五分の利廻りにて満足するものとしたならば、無論米價は大正十四年の相場よりも低くて差支ない筈である。そこで田地の利廻りが年一分、年二分、年三分、年四分、又は年五分とした場合に於て、米の賣價は一石幾何に定めることを得るかを前掲の公式を出發點として改作したる左の式に依りて假算することにした。

前掲の公式は

$$\frac{(\text{小作料})(\text{米の賣價}) - (\text{費用})}{\text{地價}} = \text{利廻}$$

であるが、此式は左の如く書換へて差支ない。

$$(利廻)(地價) = (小作料)(米の賣價) - (費用)$$

$$(利廻)(地價) + (費用) = (小作料)(米の賣價)$$

$$(利廻)(地價) + (費用)$$

$$\frac{\text{小作料}}{\text{米の賣價}}$$

此公式に當嵌む可き數字は、勸銀の調査に従へば、地價は五百六十二圓、費用は七圓二十三錢、小作料は一石二升であつて、利廻りは吾人の假定せる一分乃至五分である。此計算方法に依りて、一定の利廻りを標準としたる米價を計出するに、左の如き結果を呈するのである。

利廻	米の賣價
一分	一二・六〇
二分	一八・一一
三分	二三・六二
四分	二九・一三
五分	三四・六四

斯くの如く年五分の利廻りを標準とすれば理想米價は一石三十四圓六十四錢になり、四分とすれば二十九圓十三錢、三分ならば二十三圓六十二錢となる。然しながら、右表の米價は賣價即ち農家の手取價格であつて、之を以て直ちに都市の正米市場に於ける米の理想價格とすることが出来ない。何故となれば、之に對して運賃、其他の諸掛り、問屋の口錢等として、數圓加へなければならぬからである。今假りに右表の米價に四圓づゝ加算するとすれば、米の理想價格は左の如くなる。

利廻り 米の理想價格

一分	一六・六〇
二分	二二・一一
三分	二七・六二
四分	三三・一三
五分	三七・六四

即ち田地の利廻りを一分とすれば、米の理想價格は十六圓臺となり、三分とすれば二十七圓臺、五分とすれば三十七圓臺になる。

要するに、米の生産費を標準として米の理想價格を算定するに當つて、假りに田地の時價は動かすことの出来ないものとすれば、其理想價格の高低は利廻りの高低に依りて定まることになる。若し農家が高き利廻りを要求すれば、米の理想價格を高く定めなければならぬことになり、農家が低き利廻りにて満足するとすれば、米價は低くとも差支ないことになる。従つて米價が高いと云ひ、低く過ぎると言ふも、其問題を解決するには、先づ正當なる利廻りの率を豫じめ定める必要がある。

註一 自作生産費の合計は一反に付九十九圓四十六錢であつて、收穫量は二石四斗五升の計算になつてゐるから、一石の生産費は四十圓六十錢になる。次に小作生産費の合計は百〇一圓六十七錢であつて、收穫高は二石四斗八升九合さいふことになつてゐるから、後者を以て前者を除すれば、一石は四十圓八十錢になる。然るに杉山氏は之を四十一圓二十五錢と計算して居られてゐる。一石を四十一圓二十五錢とすれば、二石四斗八升九合は百〇二圓六十七錢となつて、前記の百〇一圓六十七錢よりも丁度一圓多くなる。杉山氏は百〇一圓六十七錢をば誤つて百〇二圓六十七錢として計算されたのかも知れない。

註二 帝國農會の調査には土地の利廻りをば年三分と年四分との兩率を標準と

して計出してゐるが、杉山氏は四分を標準としたる土地資本の利子のみを引用されてゐる。

註三 『銀行通信録』(昭和三年十月號)各種債券利廻各別明細表

三 一般物價と米價

米の生産費に次いで米價の高低を判断する標準として用ひらるゝは一般物價である。蓋し米價が或る期間内に二倍になつてゐても、他の貨物も亦十割騰貴してゐるとすれば、米價は高くなつたと言ふことが出来ないからである。要するに米價のみならず、他の總ての貨物の市價も他の物價に比較して始めて高くなつたとか或は低くなつたと云ひ得るのである。然し米價と他の物價と對照するに當りて、問題となるは、何年前の米價並に他の物價を取りて現在の米價並に他の物價と比較す可きであるかといふことである。何故となれば、今の米價並に他の物價に對照するゝものが一年前の米價並に他の物價なる場合と、十年前の米價並に他の物價なる場合とでは、結果に相違を來たすからである。又、比較の出發點が二十年前である場合と、五十年前である場合とでも、勿論結果が異なるに違ひない。そ

ここで左に試みる米價と一般物價との比較に於ては、五個の異なりたる期間を取り、對照の基準を算定することにした。此五個の期間は左の如くである。

- 一、西南戦争直前四ヶ年平均
- 二、日清戦争直前五ヶ年平均
- 三、日露戦争直前五ヶ年平均
- 四、歐洲戦争直前五ヶ年平均
- 五、歐洲戦争直後二ヶ年(大正八年並に九年)平均

斯くの如く米價と一般物價とに生じたる變動を比較する爲めに、其の出發點として西南、日清、日露並に歐洲戦争直前を選んだのは、一國の經濟状態が戦争の爲めに概して著しき變化を受くるものであるから、戦争前に於ける常態的の期間は時間的對照の基準として最も適したるものと認められ得るのみならず、日清、日露、歐洲の戦役が偶然各十ヶ年を隔てゝゐる爲めに、比較を一層明瞭に且つ有意義的に行ひ得ると思はれたからである。又此三戦役前の一ヶ年を取らずして五ヶ年の平均を標準としたのは比較の基礎を出來得る限り正確なるものにしたいたい爲めに

外ならない。西南戦争前に限りて五ヶ年平均でなく四ヶ年平均を取つたのは、四ヶ年以上の統計を得ることが困難であつたからである(註二)。更に大正八年並に九年の平均を比較の一標準としたのは、其兩年に於て物價が最高潮に達してゐたのであるから、夫れと現在の米價並に一般物價とを對照せしむることが大に參考になると考へたからである。

米價と一般物價とに生じた騰落の比較をば斯くの如く西南戦争前以來五十數ヶ年に亘りて行ふことに定めたのであるが、其の實行に當りて遭遇した最初の困難なる問題は斯くの如き長期間を通じて連續的に編纂發表されてゐる物價指數が存在してゐないことであつた。貨幣制度調査會の編纂に係る『東京物價割合比較表』並に『大阪物價割合比較表』——『貨幣制度調査會報告』上卷二二五頁以下——は、明治六年より同十年に至る五ヶ年の平均市價を一〇〇として、明治六年以來の物價指數を示してゐるが、明治三十七年四月で終つてゐる。又、日本銀行の指數は明治二十年まで遡つてゐるに過ぎ無い。而かも日本銀行の指數は明治二十年より現在まで連續的に編纂されて來つたのでは無い。日銀の指數には新舊の二種あ

つて、其中舊指數は明治二十年の一月を一〇〇として編纂されたものであるが、大正二年に中止されたから、明治二十年より大正元年に至る二十六年間の物價騰落率を示してゐるに過ぎない。次に新指數は明治三十三年十月の物價を一〇〇として夫れ以來今日まで連續的に編纂發表されてゐるが、其の間に於て二回内容が變更されてゐる。即ち大正二年五月までは新指數の作製に用ひられたる貨物の品目は六十七種であつたが、同年六月に其の中十六種を削り新たに五種を加へたから、差引五十六種になつたのみならず、此種目の差換と共に、明治三十三年以來の指數を全部改算し、更に大正十四年六月に六種の品目を削除し、他に同じく六種の貨物を追加したので、品目の數は以前と同一であるが、内容は無論多少變つてゐる。

斯くの如く日本銀行の新物價指數は前後二回改訂されてはゐるが、明治三十三年十月の物價を標準として今日まで連續的に物價の騰落率を示してゐるのである。そこで此日銀の新指數並に舊指數をば貨幣制度調査會の指數と組合せて、明治六年以來本年(昭和三年)に至る五十六年間に對する合成指數を作製することに

定めた。此種の合成指數は曩に東洋經濟新報社並に飯島幡司氏等に依り作製されてゐるが(註二)、此等は既に古くなつてゐるのみならず、本稿の目的に適はざる點もあるので、新たに組合せ式の指數を試作することにしたのである。貨幣制度調査會の指數は、上文に於て指摘した如く、東京並に大阪の卸賣物價に對して別々に編纂されてゐるが、東京のみの指數を用ふることにした。日本銀行の卸賣物價指數は大正八年までは東京の外に同行の各支店所在地に對しても作製發表されてゐたのであるが、夫れ以來公表されてゐるのは東京の指數のみであるから、是れも統一を圖る爲め、新舊を通じて東京の指數を用ふことに定めた。

斯くの如くして合成物價指數編纂の爲めに選んだ指數は結局(一)貨幣制度調査會指數、(二)日本銀行舊指數、(三)大正十四年六月改正前の日本銀行新指數、並に(四)同改正後の新指數の四種であるが、此等の指數の編纂に用ひられてゐる貨物の數が皆な左表に示すが如く多少異なつてゐる。

貨幣制度調査會指數

四二

日本銀行舊指數

四〇

日本銀行新指數(大正十四年六月の改正前後共に) 五六

各指數に編入されてゐる貨物の數が斯くの如く異なつてゐるのみならず、貨物の品種が一致してゐない。日本銀行の新指數のみに就きて觀るも、貨物の數は明治三十三年より現今まで一貫して五十六種であるが、大正十四年六月に、上述の如く六種の貨物を差換へてゐるのであるから、改正前の指數と改正後の指數は内容に於て一致してゐない。従つて斯くの如く内容を異にしてゐる數箇の物價指數を総合して合成指數を作りては、首尾一貫せる標準として用ふることが出来ないやうに思はれないでも無い。然し内容が一致してゐないと言ふも、甲指數に編入してゐる貨物が悉く乙指數の貨物と異なつてゐる譯でも無く、大麥、小麥、鹽、醬油、味噌、砂糖等の如く各指數に用ひられてゐる貨物も尠なくない。加之各指數に編入されてゐる貨物の中に、名稱は甲乙兩指數間に於て異なつてゐるが、實質は同種類のもの若しくは殆んど同種類のものと看做して差支ない物品も相等にある。例へば他の指數には『銅』が編入されてゐるが、貨幣制度調査會の指數では夫れに對して、『荒銅』並に『丁銅』の二種の貨物が組入れられてゐる。又之に反して貨幣制度

調査會の指數では、單に『鐵』一種類が用ひられてゐるが、日本銀行の新指數では、『洋鐵』並に『洋釘』の二種が用ひられてゐる。此等の類似貨物は物價の變動の程度を示すことを目的とする物價指數に於ては、同種類の物品と看做しても大過はあるまい。此見解に基きて類似の貨物を同種のものと看做して各指數を對照せしむれば、次の如くなる。

東京物價指數比較表

品目	貨幣制度調査會指數		日本銀行指數		日本銀行指數	
	明治二十年	四十五年	明治三十年	大正十四年五月迄	大正十四年六月現在	大正十四年六月
米	×	×	×	×	×	×
大麥	×	×	×	×	×	×
小麥	×	×	×	×	×	×
裸麥			×	×	×	×
大豆	×	×	×	×	×	×
小豆	×		×	×	×	×
糖			×	×	×	×
小麥粉			×	×	×	×

石炭	鉛	銅	鐵	寒天	昆布	海參	鮑	鰻	鯨	鮫	及	干鰯	綿糸	絹織物	屑布	金	眞綿
炭		荒銅、丁銅		天	昆布、刻昆布	參							綿糸、紡績洋糸				
														裏地類			
														羽二重、絹裏地、甲斐絹			
														羽二重、絹裏地、甲斐絹			

紙蠟	蠟	蠟	麻	纒	材	油	炭	薪	煙	茶	鷄卵	鹽	砂	味噌	鹽	油
蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟	蠟
生蠟、晒蠟						水油、魚油				茶、製茶						
木蠟									日本刻苺	製茶						
日本紙、洋紙										製茶						
日本紙、洋紙										製茶						
										製茶						
										製茶						

石 油	酒	白 木 綿	肥 料	生 漆	食 鳥	洋 釘	皮 革 類	絹 糸	硝 子 板	硫 酸 炭 酸	牛 肉	絹 手 巾	毛 織 糸	モ ス リ ン	羅 紗	藍	石 材

煉 瓦	瓦	セメント	苛性ソーダ	燐 寸	フランネル	毛 織 子

備考 括弧内の数は、此等の類似貨物を各原指数に於けると同しく、別々に取扱ふ場合の合計である。日銀指数の数字は總て大蔵省編纂『金融事項参考書』に據る。

又、×印は品目欄の品目と同一の名称を有する貨物を示すものである。

右表に就きて、各指数共通の貨物を求むるに、大麥、小麥、油搾糟、鹽醬油、味噌、砂糖、鯨節、鶏卵、茶(又は製茶)、煙草、(又は刻莨、日本刻莨若しくは西洋莨)、薪炭、油又は水油若しくは魚油、材木、線綿、麻、壘表、石炭、銅(又は荒銅若しくは丁銅)、並に鐵の二十一種である。二十一種の貨物は指数の基礎としては少ないが、『倫敦、チョコノミスト』誌の有名なる物價指數も以前は二十二種の貨物の卸相場にて編纂してゐたのを觀ても、吾人の

合成指數の基礎となつてゐる貨物の數が二十一種に過ぎずとするも、必ずしも信賴するに足らざるものと看做す可きではあるまい。否、物價指數は一般物價に生ずる變動、換言すれば貨幣の購買力に生ずる變動を示すに過ぎないものであるから、指數が正確に作製されてゐる限り、或る期間に對しては甲指數を用ひ、次の或る期間に對しては内容を全然異にする乙指數を用ひても、必ずしも誤れる結果を呈するものと斷定出來ない。況んや吾人の合成指數に於ては共通の貨物が少くとも二十一種に上つてゐるのである。加之、合成指數の構成分子たる四箇の指數の中各二箇に共通する貨物は左表に示すが如く、貨幣制度調査會指數と日銀舊指數との間に於ける二十二種より大正十四年六月の改正前の日銀新指數と改正後の同指數との間に於ける四十七種に上つてゐるのであるから、内容は相當に統一されてゐると看做して差支あるまい。

四	指 數	共 通	—	二十一
貨	幣 制 度 調 査 會 指 數	日 本 銀 行 指 數 (明治廿年—四十五年)	√	二十二
貨	幣 制 度 調 査 會 指 數	日 本 銀 行 指 數 (明治廿三年—大正十四年五月迄)	√	二十六

貨	幣 制 度 調 査 會 指 數	日 本 銀 行 指 數 (大正十四年六月—現在)	√	二十六
日 本 銀 行 指 數 (明治二十年—四十五年)	√	三十六		
日 本 銀 行 指 數 (明治廿三年—大正十四年五月迄)	√	三十五		
日 本 銀 行 指 數 (明治廿三年—大正十四年五月迄)	√	四十七		

以上略述したる理由に基きて合成指數を編纂することに定めたのであるが、此編纂に關して更に考慮せなければならなかつた事がある。日本銀行の舊指數は米價が編入されてゐないので、即ち米を除きたる他の重要貨物の市價を以て編纂されたものであるから、米價と他の物價とを對照せしむる爲めに用ふるに良く適してゐる。然るに貨幣制度調査會の指數並に日本銀行の新指數は共に米價を含んでゐる。米價と比較する可き物價指數に米價が編入されてゐては、比較が正確に行はれ難い虞れがあるので、兩指數より米價を除いて全部改算した(註三)。左表は即ち斯くの如く改算した兩指數並に其の儘用ひたる日銀の舊指數と此等三種の指數とを以て『備考』に於て説明せる方法に依りて計出せる合成指數を示すもの

である(註四)。(目銀の新指數は大正十四年六月に六種貨物の差換を行つたのであるから、其の内容は同月前と同月以來との間に多少相違してゐるも、指數としては連續してゐるのであつて、此品目の改訂に依りて少しも中斷されてゐないが故に、左表に於ては新指數は一箇の指數として取扱ふことにした。

年度	(甲) 貨幣制度調査會 東京卸賣物價指數		(乙) 日本銀行 東京卸賣物價指數		(丙) 日本銀行 東京卸賣物價指數		合成指數
	明治六年より十年に至る平均相場を100とす	明治六年より十年に至る平均相場を100とす	明治二十年一月の平均相場を100とす	明治二十年一月の平均相場を100とす	明治三十三年十月の平均相場を100とす	明治三十三年十月の平均相場を100とす	
明治六年	九五・五七	九五・五七					九五・五七
同 七年	九八・四一	九八・四一					九八・四一
同 八年	一〇二・〇五	一〇二・〇五					一〇二・〇五
同 九年	一〇一・九五	一〇一・九五					一〇一・九五
同 十年	一〇二・〇〇	一〇二・〇〇					一〇二・〇〇
同 十一年	一〇〇・三四	一〇〇・三四					一〇〇・三四
同 十二年	九九・八五	九九・八五					九九・八五
同 十三年	九二・三四	九二・三四					九二・三四

年度	(一六八三) 米價は安きか高きか		第十二號
	米價は安きか高きか	米價は安きか高きか	
同 十四年	八九・九三		八九・九三
同 十五年	九〇・二七		九〇・二七
同 十六年	九一・三四		九一・三四
同 十七年	九四・四九		九四・四九
同 十八年	九八・二九		九八・二九
同 十九年	九五・五八		九五・五八
同 二十年	九九・八〇		九九・八〇
同 二十一年	一〇二・九五		一〇二・九五
同 二十二年	一〇八・二四		一〇八・二四
同 二十三年	一一一・五六		一一一・五六
同 二十四年	一一一・八八		一一一・八八
同 二十五年	一一六・一七		一一六・一七
同 二十六年	一一六・六三		一一六・六三
同 二十七年	一一一・九七		一一一・九七
同 二十八年 (四月迄)		一三・五	一三・五
同 二十九年		一四五	一四五
同 三十年		一六一	一五七・七九
同 三十一年		一七〇	一六六・六一

第三十二卷 (一六八四)

米價は安きか高きか

第十二號

三六

同 三十二年	一七二	一六七・五九
同 三十三年	一八三	一七九・三五
同 三十四年	一七五	一七一・五一
同 三十五年	一七二	一七三・二七
同 三十六年	一八三	一八三・七一
同 三十七年	一九四	一九三・二八
同 三十八年	二一三	二〇七・八一
同 三十九年	二一六	二一四・六三
同 四十年	二二三	二三〇・五四
同 四十一年	二二六	二二三・三五
同 四十二年	二一五	二一三・二〇
同 四十三年	二二一	二一四・九九
同 四十四年	二二九	二二二・九九
同 四十五年	二四五	二三四・八〇
大正 元年	一三一・二〇	二三四・五七
大正 二年	一三一・〇七	二三五・一四
同 三年	一二五・八〇	二二九・六三
同 四年	一二八・三一	二七九・六三
同 五年	一五五・七一	二七八・六六

同 十六年	一九五・八七	三五〇・五三
同 十七年	二五四・六二	四五五・六八
同 十八年	三一〇・五八	五五五・八二
同 十九年	三四二・四〇	六一二・七七
同 二十年	二六五・〇五	四七四・三四
同 二十一年	二五八・三一	四六二・二八
同 二十二年	二六二・七五	四七〇・二三
同 二十三年	二七二・〇二	四八六・八二
同 二十四年	二六五・四四	四七五・〇四
同 二十五年	二三五・五一	四二一・四八
昭和 元年	二三三・六七	四〇〇・二九
昭和 二年	二三三・六五	四〇〇・二五
同 三年		

合成指数編纂方法

- 一、明治六年より同二十六年迄は甲指数をそのまま採用す。
- 二、明治二十七年より同三十四年迄は左記の算式によりて求む。

$$\frac{\text{毎年の乙指数} \times 116.68 \text{ (明治26年の甲指数)}}{119 \text{ (明治26年の乙指数)}} = \text{合成指数}$$

第三十二卷 (一六八五)

米價は安きか高きか

第十二號

三七

三、明治三十五年より昭和三年迄は左記の算式によりて求む。

$$\frac{\text{明治34年の合成指数} \times \text{毎年の丙指数}}{\text{明治34年の丙指数}} = \text{合成指数}$$

さて右表に示す合成指数を基礎として理想米價を計出する段取りとなつた。そこで先づ(一)西南戦争前の四ケ年、(二)日清戦争前の五ケ年、(三)日露戦争前の五ケ年、(四)歐洲戦争前の五ケ年、並に(五)歐洲戦争直後の二ケ年(大正八年及び九年)間に於ける合成一般物價指數の平均を計出し、此五個の平均を左表(三九頁)の(甲)欄に載せた。次に昭和三年度の一般物價指數と此五個の平均とを比較して、米價を除きたる一般物價が各期間内に於て、即ち(一)西南戦争以來、(二)日清戦争以來、(三)日露戦争以來、(四)歐洲戦争以來、並に(五)大正八、九年以來今日までの間に於て幾何騰貴若しくは低落したかを知りたいのであるが、此計算を行ひつゝあつた當時、——昭和三年十月上旬——に於ては、同年の一月より八月までに至る月次的指數が發表されてゐたに過ぎないから、假りに此八ヶ月分の月次的指數を平均して、昭和三年度の一般物價指數を代表せしむることとした。此指數は左表の(乙)欄に載せてある。次には比較の各出發點たる一般物價指數の平均を以て此昭和三年度の指數を除して、各期

間内に於ける物價騰落の率を計算したのであるが、此五個の騰落率は(丙)欄に掲げた。更に比較の各基礎年間、即ち西南戦争前の四ケ年、日清戦争前の五ケ年等に於ける正米一石の實際市價の平均を計算し左表の(丁)欄に列記した。最後に此正米の實際市價に各期間に於ける一般物價騰落率を乗じて得たる米の理想價格を左表の(戊)欄に掲げたのである。

戰 役 期 間	(甲) 合成一般物價指數平均	(乙) 昭和三年度指數	(丙) (甲)に對する(乙)の割合	(丁) 實際米價平均(正米一石)	(戊) 理想價格
西南戦争前 明治六年	九九・五〇	(八月迄) 四〇〇・二五	四〇二・二六	六〇・九〇	二四・五九八
日清戦争前 明治二十二年	一一二・九〇	(八月迄) 四〇〇・二五	三五四・五二	七・三二六	二五・九三七
日露戦争前 明治三十二年	一七五・〇九	(八月迄) 四〇〇・二五	二二八・六〇	一一・二六六	二八・〇四〇
歐洲戦争前 明治四十二年	二二四・一一	(八月迄) 四〇〇・二五	一七八・六〇	一七・三二二	三〇・九三七
歐洲戦争後 大正八年	五八四・三〇	(八月迄) 四〇〇・二五	六八・五〇	四〇〇・六五	二七・四四五

即ち右表を觀るに、先づ西南戦争前の四ケ年間に於ける米價以外の一般物價指

數の平均は九九五〇であつて、昭和三年度八月までの指數は四〇〇・二五であつたから、西南戦争前の物價を一〇〇・〇〇とすれば、昭和三年の物價は四〇二・二六、即ち四倍強になつてゐる。従つて假りに西南戦争前の米價と他の重要物價との關係が正當或は適當のものであつたとすれば、米價が現今西南戦争前の四倍位になつてゐるとすれば、夫れが適當なる若しくは理想的値段であると云はなければならぬ。此見地よりして計出したる米の理想價格は、右表に示すが如く、一石二十四圓五十九錢強である。更に同一方法に依りて計算したる理想價格は、

日清戦争前を出發點とすれば 二九・九三^四七

日露戦争前を出發點とすれば 二八・〇四〇

歐洲戦争前を出發點とすれば 三〇・九三七

歐洲戦争直後を出發點とすれば 二七・四四五

なる。即ち米の理想價格は西南戦争前を標準とせる二十四圓五十九錢八厘を最低とし、歐洲戦争前を出發點とする三十圓九十三錢七厘を最高としてゐる。換

言すれば、五個の標準期間の孰れを出發點とするも、米價は一石三十一圓以下を以て適當なる目下の價格と看做す可きやに見えるのである。

註一 明治六年より明治二十六年に至る二十一ヶ年に對しては、貨幣制度調査會の編纂したる物價指數を用ふることに定めたのであるが、西南戦争前の指數は明治六年より九年に至る四ヶ年に亘つてゐるに過ぎないから、已むを得ず、西南戦争前に對しては四ヶ年の平均を用ふることに定めた。

註二 東洋經濟新報社發行(明治四十二年四月三日)『明治金融史』(百八十八頁)

飯島幡司著『金融經濟論』(大正七年五月十三日)(百〇一頁—百〇八頁)

註三 貨幣制度調査會の東京物價割合比較表『貨幣制度調査會報告』上卷(二百二十五頁—二百二十八頁)では明治六年より明治二十七年(四月まで)に至る二十一ヶ年間に對し、各年度毎に四十二種の貨物市價の指數を合計し、合計を四十二を以て除して、各年度の平均指數を計出したのであるが、此合計も表に掲載されてゐるから、此合計より米價の指數を差引き、殘數を四十一にて除して、米價以外の一般物價を作製した。但し明治六年に於ては寒天の市價の指數を缺いてゐるから、夫れを顧慮に入れて改算した。日銀の新指數に就きては毎年度或は、毎月(昭和三年)の指數に五十六指數に編入されてゐる貨物の數——を乗じ、其積より米價の指數を差引き、殘數をば

五十五にて除して、米價を含まざる一般物價を計出したのである。

註四 此合成指數は本文の表の『備考』に於て説明せるが如く、貨幣制度調査會の指數を基礎として歷年順に他の指數を換算して作つたのである。然し此計算が果して正確であるや否かを検査する爲めに、之は正反對の方法、即ち日銀の新指數を基礎として既往に遡りて逆に他の指數を換算して得た合成指數は左表の最上段(甲)に示す指數Bである。(本文の指數をAとする)

年 度	合成指數		換算したる合成指數		合成指數の差	
	A	B	A	B	A(+)	B(+)
明治六年	五三・六三	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇		
同 七年	五五・二三	一〇二・九七	一〇二・九七	一〇二・九八		〇・〇一
同 八年	五七・二七	一〇六・七八	一〇六・七八	一〇六・七九		〇・〇一
同 九年	五七・二一	一〇六・六八	一〇六・六八	一〇六・六八		
同 十年	五七・三四	一〇六・七三	一〇六・七三	一〇六・七三		
同 十一年	五六・三一	一〇四・九九	一〇四・九九	一〇五・〇〇		〇・〇一
同 十二年	五六・〇三	一〇四・四八	一〇四・四八	一〇四・四八		
同 十三年	五一・八二	九六・六二	九六・六二	九六・六三		〇・〇一
同 十四年	五〇・四七	九四・一〇	九四・一〇	九四・一一		〇・〇一

同 十五年	五〇・六六	九四・四五	九四・四五	九四・四六		〇・〇一
同 十六年	五一・二六	九五・五七	九五・五七	九五・五八		〇・〇一
同 十七年	五三・〇三	九八・八七	九八・八七	九八・八八		〇・〇一
同 十八年	五五・一六	一〇二・八五	一〇二・八五	一〇二・八五		
同 十九年	五三・六四	一〇〇・〇一	一〇〇・〇一	一〇〇・〇一		〇・〇一
同 二十年	五六・〇一	一〇四・四三	一〇四・四三	一〇四・四四		〇・〇一
同 二十一年	五七・七七	一〇七・七二	一〇七・七二	一〇七・七二		
同 二十二年	六〇・七四	一一三・二六	一一三・二六	一一三・二六		
同 二十三年	六二・六〇	一一六・七三	一一六・七三	一一六・七二		〇・〇一
同 二十四年	六二・七八	一一七・〇七	一一七・〇七	一一七・〇六		〇・〇一
同 二十五年	六五・一九	一二一・五五	一二一・五五	一二一・五六		〇・〇一
同 二十六年	六五・一六	一二二・〇四	一二二・〇四	一二一・五〇		〇・五四
同 二十七年	六九・〇〇	一二九・二一	一二九・二一	一二八・六六		〇・五五
同 二十八年	七三・九三	一三八・四四	一三八・四四	一三七・八五		〇・五九
同 二十九年	七九・四〇	一四八・七〇	一四八・七〇	一四八・〇五		〇・六五
同 三十年	八八・一六	一六五・一〇	一六五・一〇	一六四・三九		〇・七一
同 三十一年	九三・〇九	一七四・三三	一七四・三三	一七三・五八		〇・七五
同 三十二年	九三・六四	一七五・三六	一七五・三六	一七四・六〇		〇・七六

第二十二卷

(一六九一)

米價は安きか高きか

第十二號

四三

同 三十三年	一〇〇・二二	一八七・六六	一八六・八五	〇・八一
同 三十四年	九五・八三	一七九・四六	一七八・六九	〇・七七
同 三十五年	九六・八二	一八一・三〇	一八〇・五三	〇・七七
同 三十六年	一〇三・六五	一九二・二三	一九一・四〇	〇・八三
同 三十七年	一〇八・〇〇	二〇二・二四	二〇一・三八	〇・八六
同 三十八年	一一六・一二	二一七・四四	二一六・五二	〇・九二
同 三十九年	一一九・九三	二二四・五八	二二三・六二	〇・九六
同 四十年	一二八・八二	二四一・二三	二四〇・二〇	一・〇三
同 四十一年	一二四・八〇	二三三・七〇	二三二・七一	〇・九九
同 四十二年	一一九・一三	二二三・〇八	二二三・一三	〇・九五
同 四十三年	一二〇・一三	二二四・九六	二二四・〇〇	〇・九六
同 四十四年	一二四・六〇	二三三・三三	二三二・三三	一・〇〇
同 四十五年	一三一・二〇	二四五・六八	二四四・六四	一・〇四
大正 元年	一三一・〇七	二四五・四四	二四四・四〇	一・〇四
同 二年	一二五・八〇	二三五・五八	二三四・五七	一・〇一
同 三年	一二八・三一	二四〇・二七	二三九・五	一・〇二
同 四年	一五五・七一	二九一・五八	二九〇・三四	一・二四
同 五年	一九五・八七	三六六・七八	三六五・二二	一・五六

同 七年	二五四・六二	四七六・八〇	四七四・七七	二・〇三
同 八年	三一〇・五八	五八一・五八	五七九・一二	二・四六
同 九年	三四二・四〇	六四一・一七	六三八・四五	二・七二
同 十年	二六五・〇五	四九六・三三	四九四・二四	二・〇九
同 十一年	二五八・三一	四八三・七一	四八一・六五	二・〇六
同 十二年	二六二・七五	四九二・〇三	四八九・九三	二・一〇
同 十三年	二七二・〇二	五〇九・三九	五〇七・二二	二・一七
同 十四年	二六五・四四	四九七・〇六	四九四・九五	二・一一
同 十五年	二三五・五一	四四一・〇二	四三九・一四	一・八八
昭和 元年	二三三・六七	四一八・八四	四一七・〇六	一・七八
同 二年	二三三・六五	四一八・八〇	四一七・〇二	一・七八

備考

合成指数編纂方法

一、明治三十四年より昭和三年迄は毎年の丙指数をそのまま合成指数として採用す。

二、明治二十六年より同三十三年迄は左記の算式によりて求む。

$$\frac{95.83 \text{ (明治34年の合成指数)} \times \text{毎年の乙指数}}{175 \text{ (明治34年の乙指数)}} = \text{合成指数}$$

三、明治六年より同二十五年迄は左記の算式によりて、求む。

$$\text{毎年の甲指數} \times \frac{65.45 \text{ (明治26年の合成指數)}}{116.63 \text{ (明治26年の甲指數)}} = \text{合成指數}$$

此合成指數AとBとの對照を容易ならしむる爲めに、右表の(乙)並に(丙)欄に示すが如く、兩者共に明治六年に對する指數を以て他の年度の指數を除して、全部を百分比例にて示し、各年度の比例を比較することにした。若し合成指數Aの計算が正確であるとするならば、逆の方法に依りて計出した合成指數BはAと略ぼ一致す可きである。そこで此合成指數の差は右表の(丁)並に(戊)欄に示すが如く、大正七年より大正十四年に至る、八ヶ年間に於ては百分の二以上に達してゐるが、其の他の年度に於ては二分以下なるのみならず、大多數は一分以下になつてゐる。是れは合成指數の計算が略ぼ正確である證と看做すことが出来ると思ふ。

四 食料品の市價と米價

前項に於ては、米價以外の一般物價と米價とを比較して米の理想價格を計算したのであるが、此計算の基礎として用ひたる諸種の物價指數は食料品、原料、燃料、衣類又は建築の材料、肥料等種々雑多の貨物の市價を以て編纂したものであるから、斯くの如き指數の變動率に依りて米の理想價格を計算するのは無理であると思ふ。

へる人があるかも知れない。一般物價が或る一期間内に十割騰貴してゐれば、米價も亦十割騰貴するのが順當であるとするのは一應尤ものやうに思はれるが、夫れは貨幣の購買力を中心として觀るから、そう考へられるのである。即ち一般物價が二倍に騰貴したときには、一般貨物に對する貨幣の購買力が半減してゐるのである。従つて米に對しても貨幣が其の購買力の一半を失つてゐるのが當然であると思はれるのは必ずしも誤つてはゐない。然しながら一般物價が十割騰貴したとか、或は五割低落したとか言ふのは、多數貨物の市價が平均十割騰貴し若しくは平均五割下落したことを云々してゐるのであつて、勿論總ての物價が均一に十割づつ騰貴したことを意味しない。夫れ故に、物價が十割騰貴してゐる際に於て、米價騰貴率も亦十割でなければならぬといふ強固なる理由はないのである。斯くの如く米價の騰落の率が他の物價に生じたる騰落の平均率と常に必ずしも一致す可きものであると言ふことは出来ないが、米價が消費の目的上に於て米穀に類似してゐる貨物、即ち米以外の食料品の市價と同様に動くべきものであるか、或は同様に動くのが最も自然的であり、且つ生産者に對して公平ではあるまい

かき考へ得られないでも無い。そこで此見地から他の食料品の市價の指數を作り、一般物價の場合と同じく、此指數を米價と對照せしめ、其比率を基礎として米の理想價格を試算することにした。選んだ食料品の市價は矢張り、貨幣制度調査會並に日本銀行の調査に係る物價表に據ることと定めたのであるが、比較の正確を期する爲め、銘柄の不明のものは除くこととした結果として、食料品の騰落率算定に用いたものは不幸にして僅かに(一)大麥、(二)小麥、(三)大豆、(四)小豆、(五)醬油、(六)味噌、(七)砂糖に過ぎない。加之、日本銀行は近年各商品の市價の指數のみを公表し、市價其物を發表しないから、昭和三年度に對しては、東京商工會議所の物價報告(七月分迄)に據ることとした。所が貨幣制度調査會、日本銀行並に東京商工會議所が市價を調査せる食料品中には、銘柄並に數量の單位を異にしてゐるものがあるので、之に對しては必要なる換算を行つた。

備て上記七種の食料品の市價騰落率を基礎として、前項に於けると同様の方法に依り、正米の理想價格を計算せるに、次の如き結果を呈した(註)。

標準年	正米の理想價格
明治六年——九年(西南戰爭前)	三八・六九〇
明治二十二年——二十六年(日清戰爭前)	三四・一二九
明治三十二年——三十六年(日露戰爭前)	三六・一六〇
明治四十二年——大正二年(歐洲戰爭前)	三八・九二三
大正八年——九年(歐洲戰爭直後)	四一・四一五

右表に示すが如く、食料品の市價の騰落率を標準として試算した米の理想價格は、一般物價を目安せる場合よりも餘程高く、日清戰爭前を出發點とする三十四圓十二錢九厘を最低とし、大正八、九年を基年とする四十一圓四十一錢五厘にまで上つてゐる。即ち一般物價指數を基礎とした理想價格に比して、右表の價格は十數圓も高くなつてゐる。換言すれば、他の食料品に比して米は餘程割安になつてゐるのである。他の食料品の騰落の率を標準とすれば、米價は目下一石三十四五圓位が相當であると言へるかも知れない。

註 食料品の騰落率を標準とする米の理想價格を算出する爲めに、先づ左表に於

て示す如く、各基礎年間に對する大麥以下七種の食料品の市價の平均を計算した。

西南戦争前

年次	品目	大麥 (中一石)	小麥 (中一石)	大豆 (中一石)	小豆 (中一石)	醬油 (十樽)	味噌 (十貫目)	砂糖 (初雪一貫目)
明治六年		一・四四七	二・六〇六	三・七八四	三・五八一	五・八五〇	〇・七七二	〇・四九二
同 七年		一・八三一	二・七四六	四・一九一	四・三七四	五・七六九	〇・八七六	〇・四三九
同 八年		一・九三二	二・九七七	四・三七三	五・八三二	六・四二八	一・一三二	〇・四五四
同 九年		一・七二〇	四・一〇四	四・六三二	五・五九九	七・六二五	一・一四七	〇・四五五
總計		六・九三〇	二・四三三	一七・四八〇	一九・三八六	二五・六七二	三・九二七	一・八四〇
平均		一・七三三	三・一〇八	四・三七〇	四・八四七	六・一八〇	〇・九八二	〇・四六〇

日清戦争前

年次	品目	大麥 (中一石)	小麥 (中一石)	大豆 (中一石)	小豆 (中一石)	醬油 (十樽)	味噌 (十貫目)	砂糖 (初雪一貫目)
明治三十二年		二・二八九	四・〇七〇	四・七九六	四・六五二	八・九四六	一・二四二	〇・四二八
同 二十三年		三・九三九	五・二四九	五・二九三	六・七九八	七・六六八	一・六二六	〇・四五〇
同 二十四年		三・五九一	五・四六七	四・九二六	六・五三二	七・八六一	一・五八七	〇・三八〇
同 二十五年		三・三六七	五・一六八	五・一六八	五・五七一	八・六六三	一・五七五	〇・四四四
同 二十六年		三・一三五	五・〇二五	五・四四七	六・六九六	八・七七八	一・五三三	〇・五〇六
總計		一六・三一九	二四・九七九	二五・四三〇	三〇・二四九	四一・九一六	七・五六三	二・二〇八
平均		三・二六四	四・九九六	五・〇八六	六・〇五〇	八・三八三	一・五一一	〇・四四二

日露戦争前

年次	品目	大麥 (中一石)	小麥 (中一石)	大豆 (中一石)	小豆 (中一石)	醬油 (十樽)	味噌 (十貫目)	砂糖 (初雪一貫目)
明治三十二年		四・七四四	七・三八九	七・五五二	一〇・三五八	一三・六六六	二・九七四	〇・六七七
同 三十三年		四・五二二	八・一五二	七・三七八	八・三一六	一四・七七七	二・九〇八	〇・七〇二
同 三十四年		三・九五五	七・五四四	七・〇六七	六・五七七	一四・四七	二・四九九	〇・七四三
同 三十五年		四・五四四	七・八五〇	七・五〇四	一一・一一三	一三・〇三	二・四九九	〇・五六二
同 三十六年		六・〇八三	九・七三三	七・五三八	一一・九四二	一三・三三六	二・九七一	〇・六七四
總計		二二・八四九	四〇・六六八	三七・〇三九	四八・三〇七	六九・二九	一三・八四八	三・三五八
平均		四・七七〇	八・一三四	七・四〇八	九・六六一	一三・八五八	二・七七〇	〇・六六一

歐洲戦争前

年次	品目	大麥 (中一石)	小麥 (中一石)	大豆 (中一石)	小豆 (中一石)	醬油 (十樽)	味噌 (十貫目)	砂糖 (初雪一貫目)
明治四十二年		五・七三六	一・一三〇	七・四五三	一一・七〇七	一七・九〇	二・八五四	一・〇五一

第三十二卷 (一六九九) 米價は安きか高きか

原表には北海道産上二石につき一石の割合に換算した。

原表には北海道産上二石につき一石の割合に換算した。

原表には北海道産上二石につき一石の割合に換算した。

原表には北海道産上二石につき一石の割合に換算した。

原表には北海道産上二石につき一石の割合に換算した。

原表には北海道産上二石につき一石の割合に換算した。

原表には北海道産上二石につき一石の割合に換算した。

原表には北海道産上二石につき一石の割合に換算した。

原表には北海道産上二石につき一石の割合に換算した。

同 四十三年	五〇・一六	一〇・九四八	九・三七〇	一一・六三七	一八・一三	二・八七七	〇・九九八
同 四十四年	五・五八四	一〇・三四九	九・二九二	一一・〇〇八	一六・一五	二・八五四	一・〇三〇
同 四十五年	八・二八六	一一・五九三	一〇・四九八	一四・七九二	一五・八七	三・一五七	一・三二六
大正二年	七・九四三	一二・〇〇三	一〇・五三三	一六・一六八	一五・七〇	三・三三〇	一・一六八
總計	三二・五六五	五六・〇一三	四七・一三七	六五・三一二	八三・七五	一五・〇八二	五四・七三
平均	六・五一三	一一・二〇三	九・四二七	一三・〇六二	一六・七五〇	三・〇一六	一・〇九五

歐洲戰爭直後

原表に北米道運上石に付示されてある価格を中一石の價格に換算した。

原表には一樽に付示されてある価格を中一石の價格に換算した。

原表に茶葉對雙(百斤)に付示されてある價格を初雪一貫目(百斤)の價格に換算した。

年次/品目	大麥 (中一石)	小麥 (中一石)	大豆 (中一石)	小豆 (豆中一)	醬油 (十樽)	味噌 (十貫目)	砂糖 (初雪一貫目)
大正八年	一六・四一五	二二・五〇〇	二〇・八〇五	三五・一六六	四〇・九五	八・三五七	二・二八五
大正九年	一五・六七二	二二・九一六	一九・六〇八	三六・八六五	四八・〇二	八・八三一	三・〇一九
總計	三二・〇八六	四五・四六〇	四〇・四一三	七二・〇三一	八八・九七	一七・一八八	五・三〇四
平均	一六・〇四三	二二・七三〇	二〇・二〇七	三六・〇一六	四四・四九	八・五九四	二・六五二

次に斯くの如く計出し左表の(甲)欄に載せたる各期に於ける、大麥、小麥、大豆、小豆、醬油、味噌並に砂糖の七種食料品の平均價格を以て(乙)欄に列記した各食料品の昭和三年度(七月迄)の平均市價を除して(丙)欄に示したる倍數を計算し、更に各基礎期間に於ける正米の平均市價(丁)を計出して、之に(丙)欄の倍數を乗じて、(戊)欄に示す正米の理想價格を算定したのである。

西南戰爭前を標準とする米の理想價格

品目	(甲) 明治六年 同九年平均	(乙) 昭和三年度 七月迄平均	(丙) (甲)に對する (乙)の割合	(丁) 正米の實際價格 明治六年 同九年平均	(戊) 正米の理想價格
大麥	一・七三三	一一・二三六	倍	六・四八四	六・四八四
小麥	三・一〇八	一八・九二一	倍	六・〇八八	六・〇八八
大豆	四・三七〇	二八・〇一二	倍	六・四一〇	六・四一〇
小豆	四・八四七	二七・一七〇	倍	五・六〇六	五・六〇六
醬油	六・二八〇	五〇・四四五	倍	八・一六三	八・一六三
味噌	〇・九八二	七・〇〇〇	倍	七・一二八	七・一二八
砂糖	〇・四六〇	二・一一三	倍	四・五九三	四・五九三
平均	—	—	—	六・三五三	六・〇九〇
平均	—	—	—	—	三八・六九〇

日清戰爭前を標準とする米の理想價格

品目	(甲) 明治二十二年 同二十六年平均	(乙) 昭和三年度 七月迄の平均	(丙) (甲)に對する (乙)の割合	(丁) 正米の實際價格 明治廿二年 同廿六年平均	(戊) 正米の理想價格
大麥	三・二六四	一一・三三六	倍	三・四四二	三・四四二

第二十二卷 (一七〇一) 米價は安きか高きか

小麥	四・九九六	一八・九二一	三・七八七		
大豆	五・〇八六	二八・〇一二	五・五〇八		
小豆	六・〇五〇	二七・一七〇	四・四九一		
醬油	八・三八三	五〇・四四五	六・〇一八		
味噌	一・五一三	七・〇〇〇	四・六二七		
砂糖	〇・四四二	二・一一三	四・七八一	七・三一六	三・四二九
平均			四・六六五		

日露戦争前を標準とする米の理想價格

品目	(甲)	(乙)	(丙)	(丁)	(戊)
大麥	四・七七〇	一一・二三六	二・三五六		
小麥	八・一三四	一八・九二一	二・三二六		
大豆	七・四〇八	二八・〇一二	三・七八一		
小豆	九・六六一	二七・一七〇	二・八二二		
醬油	一三・八五八	五〇・四四五	三・六四〇		
味噌	二・七七〇	七・〇〇〇	二・五二七		
砂糖	〇・六六一	二・一一三	三・一九七		
平均			二・九四八	一一・二六六	三六・一六〇

歐洲戦争前を標準とする米の理想價格

品目	(甲)	(乙)	(丙)	(丁)	(戊)
大麥	六・五一三	一一・二三六	一・七二五		
小麥	一一・二〇三	一八・九二一	二・六八九		
大豆	九・四二七	二八・〇一二	二・九七一		
小豆	一三・〇六二	二七・一七〇	二・〇八〇		
醬油	一六・七五〇	五〇・四四五	三・〇一二		
味噌	三・〇一六	七・〇〇〇	二・三二一		
砂糖	一・〇九五	二・一一三	一・九三〇		
平均			二・二四七	一七・三三二	三八・九二三

歐洲戦争直後を標準とする米の理想價格

品目	(甲)	(乙)	(丙)	(丁)	(戊)
大麥	一六・〇四三	一一・四三六	〇・七二三		
小麥	大正八年 同九年平均	昭和三年度 七月迄平均	(甲)に對する (乙)の割合	正米の實際價格 大正八年—九年 平均	正米の理 想價格

小麥	二二・七三〇	一八・九二一	〇・八三二
大豆	二〇・二〇七	二八・〇一三	一・三八六
小豆	三六・〇一六	二七・一七〇	〇・七五四
醬油	四四・四九〇	五〇・四四五	一・一三四
味噌	八・五九四	七・〇〇〇	〇・八一五
砂糖	二・六五二	二・一一三	〇・七九七
平均	—	—	〇・九一九
			四五・〇六五
			四一・四一五

五 穀物の市價と米價

前項に於て示したる如く、米と同様に食料品たる大麥、小麥、大豆、小豆、醬油、味噌並に砂糖の七種貨物の市價を標準とすれば、米價は餘程割安になつてゐるが、然らば其七種食料品中にて生産上の立場より觀ても、將た又消費上の見地より考察するも、米と最も密接なる關係を有する大麥、小麥、大豆、並に小豆の四種の穀物丈けの市價を標準としたならば、米の正當價格は幾何程になるであらうか。此點をも明かにする爲めに、前項に於て七種の食料品の市價に生じたる變動を基礎として米の理想價格を算出したと全然同一の方法に依りて、大麥、小麥、大豆並に小豆の市價を

標準としたる米の理想價格を假算したるに、左の結果を得た(註)。

基 年	米の理想價格
一、西南戦争前を出發點とすれば	三七・四三五
二、日清戦争前を出發點とすれば	三一・五一〇
三、日露戦争前を出發點とすれば	三四・五七八
四、歐洲戦争前を出發點とすれば	三六・六五三
五、歐洲戦争直後を出發點とすれば	四一・五〇五

右表に示すが如く、四種穀物を標準とした米の理想價格は、七種の食料品を比較の基礎とした米の理想價格よりも、概して餘程低くなつてゐる。尤も歐洲戦争直後を出發點として計算した米の理想價格は食料品の市價を標準とせる場合と略ぼ同額であつて、一石四十一圓五十錢に上つてゐるが、之を除けば、西南戦争前を出發點とする三十七圓臺を最高とし、最低は日清戦争前を出發點とする三十一圓臺になつてゐる。従つて米以外の穀物丈けを標準としたる米の理想價格は食料品の市價を比較の基準とする場合に於けるよりも餘程實際市價に接近してゐると

云ふことが出来る。

註 穀物の市價の變動率を標準とする米の理想價格の計算は左の諸表の通りに行つたのである。其の説明に就きては前項の「註」参照。

西南戦争前を標準とする米の理想價格

大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三

日清戦争前を標準とする米の理想價格

大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三

大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三

日露戦争前を標準とする米の理想價格

大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三

戦洲戦争前を標準とする米の理想價格

大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三
大豆	平均	小	大	小	大
平均	四・八四七	四・三七〇	三・一〇八	一・七三三	一・七三三

第二十二卷

(一七〇七) 米價は安きか高きか

第十二號

五九

大豆	九・四二七	二八・〇一二	二・九七一	
小豆	一三〇・六二二	二七・一七〇	二・〇八〇	
平均			二・二一六	一七・三三二
				三六・六五三

戦洲戦争直後を標準とする米の理想價格

	(甲)	(乙)	(丙)	(丁)	(戊)
大 麥	一六・〇四三	一一・二三六	〇・七一三		
小 麥	二二・七三〇	一八・九二一	〇・八三二		
大 豆	二〇・三〇七	二八・〇二二	一・三八六		
小 豆	三六・〇一六	二七・一七〇	〇・七五四		
平均			〇・九二二	四五・〇六五	四一・五〇五

六 貨銀と米價

以上は米の生産費、一般物價、及び食料品、並に穀物等に生じたる變動を基準として算定したる米の理想價格であつて、米の生産者並に一般消費者に對して利害關係を有するものであるが、米價の騰落に依りて最も大なる影響を蒙るのは、家計費に比して最も多く米代を支出してゐる勞働者である。従つて勞働者の賃銀の騰

落率と米價の騰落率とを比較するのは、他の標準と米價とを對照せしむるよりも重要である。云はねばならぬ。夫れ故、最後に賃銀の騰落率を基礎として米の理想價格を算定することにした。

所が一般物價に於けると同じく賃銀にも西南戦争前以來五十數ヶ年に對して連續的に編製されてゐる賃銀指數を發見出來なかつたので、不得已貨幣制度調査會の東京賃銀割合比較表(明治六年より二十六年まで)、大藏省の編纂せる東京賃銀指數(明治二十六年より大正十年まで)並に東京商工會議所の調査に係る東京賃銀指數(大正九年以降)を繼合せて、東京賃銀の合成指數を作製し、此指數を原數として、前と同一の方法に依りて米の理想價格を計算したるに左の結果を得た(註)。

出 發 點

米の理想價格

- 一、西南戦争前を出發點とすれば 六〇・四三七
- 二、日清戦争前を出發點とすれば 五八・六四五
- 三、日露戦争前を出發點とすれば 五九・一四七
- 四、歐洲戦争前を出發點とすれば 六一・二五〇

五、歐洲戰爭直後を出發點とすれば 五七・〇〇七

斯くの如く賃銀の變動率を標準として計出せる米の理想價格は最も高く、歐洲戰爭直後を出發點とする五十七圓を最低とし、歐洲戰爭前を出發點とせる六十一圓二十五錢を最高としてゐる。即ち賃銀を比較の基準とすれば、米價は大約六十圓前後を往來して居れば宜いと云ふことになる。此結果は他の場合と比して二個の特徴を現はしてゐる。其の一は孰れの出發點を採るも、他の比較に於けるとは異なりて、理想價格に大なる差がないことであつて、其の二は此場合の理想價格が揃つて著しく高く、實際價格(昭和三年十一月中旬)の約二倍にも相當してゐること以外ならない。而して前者は米價と賃銀との變動の程度が比較的によく一致してゐることを示し、後者は西南戰爭前に比して勞働者の賃銀の騰貴率が米の騰貴率の約二倍に相當することを語つてゐるのである。

註 貨幣制度調査會の賃銀指數には二種あつて、第一種は『東京賃銀割合比較表』——貨幣制度調査會報告上巻(三百六頁—三百八頁)——と稱し、三十一種の職業に就きて編纂したものであつて、卸賣物價指數の場合と同じく、明治六年より同十年に至る五ヶ年の賃銀を平均したものを一〇〇としてゐる。第二種の賃銀指數は東京物價賃銀

高低比較表の附屬明細表——同上書(三百三十七頁—三百三十九頁)——として、同一の三十一種の職業に就きて、第一種とは異なり明治六年の賃銀を一〇〇として計算したものである。所が合成物價指數の編成のために採用した貨幣制度調査會の東京物價割合比較表は第一種賃銀指數(東京賃銀割合比較表)と同じく明治六年より同十年に至る五ヶ年の物價を一〇〇としたものであるから、統一を圖るために第一種の指數を選ぶことにした。然し此指數は——第二種も同様であるが——明治六年より同二十七年までであつて、而かも二十七年は四月までの統計に據つてゐるのであるから、事實二十六年の指數で終つてゐるのである。

所が大藏省が曾て編纂した東京賃銀指數——大正七、八並に十一年調金融事項參考書——は二十四種の職業に就きて、明治三十三年十月の賃銀を一〇〇として明治二十六年以後の年度に對して編纂されてゐるから、明治二十七年以後の年度に對しては之を採用することにした。然し此指數も大正十年にて終つてゐる。所が恰かも宜し東京商工會議所編纂の新賃銀指數——東京商工會議所發行『重要經濟統計月報』昭和三年一月—七月——は大正九年の賃銀を一〇〇として、五十一種の職業に就きて編纂されてゐるから、大正十年以降の年度に對しては、此指數を採ることに定めた。以上三種の賃銀指數を組合せて一個の合成指數を作製することに定めたのであるが、各指數編纂の基礎となつてゐる職業の名稱は左表の如くである。

東京賃銀指數表

貨幣制度調査會調

大藏省調

東京商工會議所調

大工	石工	家根職	瓦葺職	木挽職	大伐職	柚切職	疊職	建具職	植木職	塗師	平人足	水道人足	井戸人足	鳶人足
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

日傭人夫
女男

壁職	瓦製造職	鍛冶職	船大工職	土方人足	製紙男工	製紙女工	綿打職	和服仕立職	鑄物職	織物職工	醬油造稼人	製茶履	煙草刻職	指物職	油絞職
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

和紙製造工
洋紙製造工

活版職工	×
下駄職	×
酒造職	×
洋服仕立職	×
煉瓦積職	×
醫師職	×
諸車製造職	×
下男	×
製絲女工	×
絹糸紡績 (精紡女工)	×
絹捻糸女工	×
機械女工	×
英大小編	×
旋盤工	×
仕上工	×
木型工	×

英大小編
女工

製革工	×
陶器轆轤工	×
硝子吹工	×
セメント 製造工	×
煉瓦製造	×
燐寸製造工	×
製藥工	×
製糖糖工	×
製粉工	×
菓子製造工	×
糖詰工	×
製材工	×
製鋼工	×
製木工	×
ペンキ塗工	×

燐寸製造
女工

靴工			×
仲仕			×
漁夫			×
下女			×
合計	三十一	二十四	五十一

右表に示すが如く、貨幣制度調査會の指數は三十一種、大藏省の指數は二十四種、東京商工會議所の指數は五十一種の職業の賃銀を以つて編纂したものであるが、職業の種類が各指數間に於て大に異なつてゐるので、三指數共通の職業は僅か九種に過ぎ無い。然しながら貨幣制度調査會の指數と此指數に直接組合はす可き大藏省指數との二指數に共通の職業は十七種に上つてゐる。且つ又大藏省指數と之に直ちに接続せらる可き東京商工會議所の指數との兩者に編入されてゐる職業の數も十四ある。加之大藏省の指數を中に挟んで間接に連結せらるゝ貨幣制度調査會の指數と東京商工會議所の指數との兩者間に於ても十四種の職業が共通になつてゐる。従つて以上三箇の指數は其内容に於て相當の連続性を有して居るから、合成指數の編纂に用ふるに適してゐると思はれる。

然らば如何にして此合成指數を編成したかといふに、明治六年より同二十六年までは貨幣制度調査會の東京賃銀高低割合表の平均指數を其の儘用ひ、明治二十七年より大正十年までは大藏省の指數を左の式に依りて換算して用ふることにした。

$$\text{大藏省指數} \times \frac{124}{57.57} (\text{明治26年の貨幣制度調査會指數}) = \text{合成指數}$$

次に大正十一年以後の年度に對しては、東京商工會議所の指數を左の式に依りて換算して用ふることにした。

$$\text{會議所指數} \times \frac{906.79}{102.2} (\text{大正10年の會議所指數}) = \text{合成指數}$$

左表は右の方法にて作製したる東京賃銀の合成指數である。

東京賃銀指數

年次	貨幣制度調査會指數	大藏省指數	東京商工會議所指數	合成指數
明治六年	九六			九六
同七年	九八			九八
同八年	一〇〇			一〇〇
同九年	一〇四			一〇四
同十年	一〇二			一〇二
同十一年	一〇二			一〇二
同十二年	九八			九八
同十三年	八七			八七
同十四年	七八			七八

第三十二卷 (一七二七)

米價は安きか高きか

第二十二卷 (一七二八)

米價は安きか高きか

同 十五年	八六		八六
同 十六年	一〇四		一〇四
同 十七年	一一七		一一七
同 十八年	一二二		一二二
同 十九年	一二六		一二六
同 二十年	一二六		一二六
同 二十一年	一二六		一二六
同 二十二年	一二六		一二六
同 二十三年	一二三		一二三
同 二十四年	一二〇		一二〇
同 二十五年	一二三		一二三
同 二十六年	一二四	五七・五七	一二四
明治二十七年(四月迄)	一二六	六三・三三	一二六
同 二十八年		六八・三三	一四七・一八
同 二十九年		七四・二九	一六〇・〇一
同 三十年		八一・五四	一七五・六三
同 三十一		八四・一七	一八一・二九

同 三十二年		八五・三八	一八三・九〇
同 三十三年		九六・五八	二〇八・二四
同 三十四年		九七・六七	二一〇・三六
同 三十五年		九八・〇四	二一一・一七
同 三十六年		九七・六三	二一〇・二八
同 三十七年		九五・六七	二〇六・〇六
同 三十八年		一〇一・〇〇	二二七・五四
同 三十九年		一〇八・六七	二三四・一六
同 四十年		一一〇・〇四	二五八・五五
同 四十一年		一二七・七五	二七五・一七
同 四十二年		一二五・九六	二七三・三〇
同 四十三年		一二六・九六	二七三・四六
同 四十四年		一二八・五八	二七六・九五
同 四十五年		一三二・二一	二八四・七七
大正 二年		一三四・五四	二八九・七八
同 三年		一三四・二一	二八九・〇七
同 四年		一三〇・四二	二八〇・九二
同 五年		一三六・五八	二九四・一八

第二十二卷 (一七一九)

米價は安きか高きか

同 六年	一六七・七九	三六一・四〇
同 七年	二一五・〇〇	四六三・〇九
同 八年	三〇二・〇〇	六五〇・四八
大正 九年	四二三・〇〇	九一・〇九
同 十年	四二二・〇〇	九〇六・七九
同 十一年	一〇九・八	九七四・二二
同 十二年	一一一・九	九九二・八五
同 十三年	一一五・八	一〇二七・四五
同 十四年	一一〇・四	九七九・五四
昭和 十五年	一〇八・八	九六五・三五
同 十六年	一一〇・四	九七九・五五
同 十七年	一一一・三	九八七・五三

右表に示したる合成指數を基礎として、一般物、價と米價との變動の比較を標準とせる米の理想價格計算に於けるは同一の方法に依りて、先づ西南戦争前並に其の他各基準期間に對する賃銀指數の平均を求め、之を昭和三年度の指數とを比較して其割合を計出し此割合をば、各基礎期間に於ける米の實際市價の平均に乗じて、米の理想價格を試算したのである。此計算の各課程に於ける計數は左の如くである。

期 間	(甲) 合成一般賃銀指數平均	(乙) 昭和三年指數	(甲)に對する(乙)の割合 (正米一石)	實際米價平均 (圓)	米の理想價格
明治 六年	九九・五〇	九八七・五三	九九二・四	六〇・九〇	六〇・四三七
同 七年	一二三・二〇	九八七・五三	八〇一・六	七・三一六	五八・六四五
同 八年	二〇四・七九	九八七・五三	四八二・二	一一・二六六	五九・一四七
明治 九年	二七九・二七	九八七・五三	三五三・六	一七・三二二	六一・二五〇
同 十年	七八〇・七八	九八七・五三	一二六・五	四五・〇六五	五七・〇〇七

七 結 論

以上(一)生産費、(二)一般物價、(三)食料品の市價、(四)穀物の市價、並に(五)賃銀を標準として米の理想價格を試算したが、此等の理想價格は標準に依りて皆な異なつてゐるのみならず、同一標準を用ふる場合に於ても、時間的の比較の出發點を異にすれば、理想價格に、著しき差を生ずることがある。即ち米の理想價格は標準の性質の如何に依りて甚だしい高低を現出するものであるから、何れの理想價格を取る可きか、問題となる。従つて今日の實際價格が高か過ぎるとか或は低く過ぎると

か云ふが如き斷定は容易に下せない。斯くの如き判斷は正確なる理想價格を算出して始めて行ひ得るのであるが、誤りのなき理想價格を定めることは不可能である。例へば田地の利廻りを二三分として見積りたる生産費又は一般物價を標準とすれば、目下(昭和三年十一月中旬)の米價は高か過ぎると言ふ可く、食料品並に穀物の市價若しくは賃銀を目安とすれば米價は低く過ぎると云ひ得るのである。然し試みに一般物價、食料品並に穀物の市價及び賃銀を標準として計出せる都合二十個の理想價格の總平均を算定するに、左表の如くなる。

出發點	標準		合計	平均
	一般物價	食料品の市價		
西南戰爭前	二四・五九八	三八・六九〇	三七・四三五	六〇・四三七
日清戰爭前	二五・九三七	三四・一二九	三一・五二〇	五八・六四五
日露戰爭前	二八・〇四〇	三六・一六〇	三四・五七八	五九・一四七
歐洲戰爭前	三〇・九三七	三八・九二三	三六・六五三	六一・二五〇
歐洲戰爭直後	二七・四四五	四一・四一五	四一・五〇五	五七・〇〇七
合計	一三六・九五七	一八九・三一七	一八一・六八一	二九六・四八六
平均	二七・三九一	三七・八六三	三六・三三六	五九・二九七
				一六〇・八八八
				四〇・二二二

右表に示すが如く、二十個の理想價格の平均は四十圓二十二錢になる。之を標準とすれば、昨今の米價は安過ぎると云ひ得る。更に之に田地の利廻を年一分、二分、三分、四分、及び年五分と看做したる米の生産費を標準として計出した五個の理想價格を加へて平均するに、三十七圓七十錢になる(註一)。之を標準としても、尙ほ米價は安過ぎると云ふを得るのである。

然しながら米の生産費の計算には、正確なる標準を求め難い田地の地價並に利廻りが重大要素となつてゐるので、夫れに基く計算に誤差が多い虞れがある故に、又賃銀の騰貴率は當然米價の騰貴率よりも高くすることを理想としなければならぬといふ見地よりして、米の生産費並に賃銀を基準とせる理想價格を除き、一般物價並に食料品及び穀物の市價を標準とせる米の理想價格のみの平均を取るに、三十三圓八十六錢になる(註二)。此理想價格の平均は目下の實際價格に比して尙ほ數圓高い。換言すれば、實際の米價は茲に試算した理想價格の平均よりも二三圓方低くなつてゐる。然し此平均數は各異なりたる出發點と標準とに依りて計出されたる種々の數量を平均したるものであるから、之に對して主きを置くこと

は避けなければならぬ。

要するに米價が高いか安いかにいふことは、其高低を判断する爲めに用ふる標準の如何に依りて定まるものである。然しながら以上述べたる所を綜合して考ふるに、少くとも目下(昭和三年十一月中旬)の相場は高くはないと言ひ得ると思はれる。

註一 此計算は左の如く行つたのである。

本文の表に載せたる理想價格の總計は

八〇四・四四一

であつて、第二項「米の生産費と米價」中に載せたる田地の利廻りを標準とする五箇の米の理想價格の合計は

一三八・二〇〇

である。此兩者を合すれば

九四二・五四一

となる。之を理想價格の數たる二十五を以て除すれば、本文の如く平均が三十七圓七十錢となるのである。

註二 此計算は左表の如くである。

出發點	標準	一般物價	食料品の市價	穀物の市價	合計	平均
西南戦争前	圓	二四・五九八	三八・六九〇	三七・四三五	一〇〇・七二三	三三・五七四
日清戦争前	圓	二五・九三七	三四・一二九	三一・五一〇	九一・五七六	三〇・五二五
日露戦争前	圓	二八・〇四〇	三六・一六〇	三四・五七八	九八・七七八	三二・九二六
歐洲戦争前	圓	三〇・九三七	三八・九二三	三六・六五三	一〇六・五一一	三五・五〇四
歐洲戦争直後	圓	二七・四四五	四一・四一五	四一・五〇五	一一〇・三六五	三六・七八八
合計	圓	一三六・九五七	一八九・三一七	一八一・六八一	五〇七・九五五	一六九・三二七
平均	圓	二七・三九一	三七・八六三	三六・三三六	一〇一・五九九	三三・八六三